

小説 上主沙夜

イラスト KRN

# 戦国花嫁

時空を翔ける恋



Chocolat Sucre

試し読み版

# 人物紹介

characters

沢口美緒

さわぐみお

姉と誕生日祝いに出かけた先で事故に遭い、戦国時代にタイムスリップしてしまう。自分とどうくりな漆姫の身代わりとして藤波家に嫁ぐことに。



漆姫

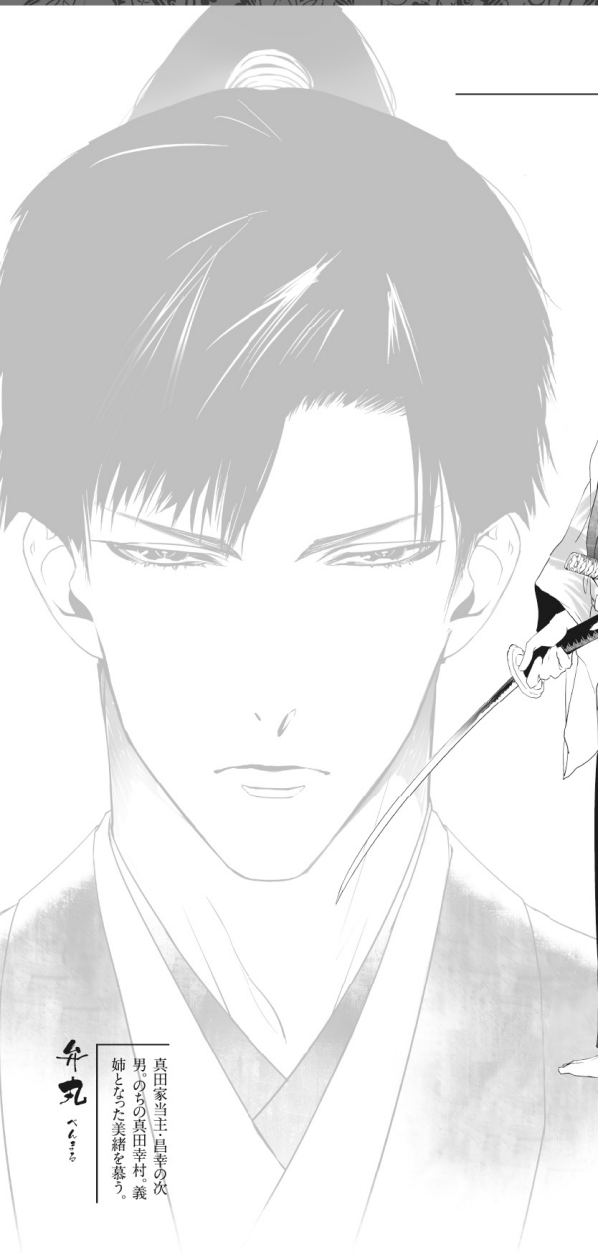
しっしめ

美緒とどうくりな瀬瀬家の姉。真田家の養女として藤波家に嫁ぐ予定だったが病気で亡くなってしまった。

# 藤波崇晃

ふじなみ たかあき

白鳥衆と称する忍びを統率する  
藤波家の当主。真田家との臣下  
契約のため、美緒の夫となる。



# 弁丸

べんまる

真田家当主・昌幸の次  
男。のち真田幸村、義  
姉となった美緒を慕う。



# 戦国花嫁

時空を翔ける恋

目次

【序章】	〇〇八
【第一章】身代わりの婚礼	〇一二
【第二章】偽りの新婚生活	〇五四
【第三章】揺れる心	〇九〇
【第四章】夢よりも深く	一三三
【第五章】裏切りの刃	一九〇
【第六章】藤の縁 <small>えん</small>	二一九
【第七章】愛別離苦	二六三
【終章】	二九七
【あとがき】	三二四



# 戦国花嫁

時空を繋げる恋



## 序章

——な……、なんでこんなことにつ……!?

美緒は目の前に置かれた三方を茫然と眺めた。ヒノキの白木で作られた小さな台。こんなもの、地鎮祭とか開山祭とか、神主が執り行う儀式や映像でしか見たことがない。

それが何故か美緒の前に端然と据えられていた。上に載っているのは盃と香の皿。同じ三方が美緒の両隣と、向かいにもある。

照明は、和紙を巻いた油皿を載せた漆塗りの灯台だけ。部屋の四隅の他、美緒の傍らにも置かれているが、電灯に慣れた目にはいかにも薄暗く、頼りなかった。

座敷には両家の家紋があしらわれた白地の水引暖簾や魔除けの鏡が飾られている。祝い事の席らしく、床の間には餅や干し魚、豆などで作られた手の込んだ品々が飾られていた。

美緒は膝の上に載せた手を、ぎゅつと握り締めた。

視線が落ちるといやでも自分が身につけている白い小袖が目に入り、ますます混乱する。

白い小袖に白い打掛、そして頭には頭巾のように作られた綿帽子。胸元には房のついた管迫（小物入れ）と懐剣——。

まさしく婚礼衣装だ。こんな古風な恰好、時代劇でしか見たことないけど。そう、これが時代劇ならどれほどよかつたか……。

しかし美緒がいるのは芝居のなかではなく『現実』だ。

美緒が生まれ育った『現代』ではないにせよ、とにかく『現実』なのだ。

これまで幾度朝を迎えても『夢』は覚めず、どんなに頬をつねっても叩いても、この信じがたい『現実』は変わらなかつた。

すつ……と障子が開いた。供を従えて入ってきた男が美緒の正面に座る。

おそるおそる顔を上げると、それは風折烏帽子かざおりえぼしに白い直垂姿ひたたれの若い男性だつた。

若いといつても美緒より五、六歳は上だろう。二十代前半くらいに思える。

鼻筋のすらりと通つた、端正な面差しの青年だつた。

現代人の美緒から見ても、切れ長の瞳が涼しげな、相当な美男子だ。思わず見とれてしまうと、底光のする黒瞳でじつと見返され、慌てて顔をうつむけた。

(……この人が、あたしの——ううん、湊姫みなとの結婚相手……)

名は藤波崇晃ふじなみ たかあき。藤波家の当主。そして、真田昌幸まいた 昌幸様が配下に加えたがっている白鳥衆はくちょうの頭領——。

(どうしよう……。思つてたよりずつと……かっこいい……。かも……。つ)

今まで現状把握するだけで精一杯だつた美緒には、相手の容貌のんきを暢気に想像している余地など全然なかつた。それだけに、望外の美男子で啞然あぜんとしてしまう。

心臓がドキドキと早鐘を打ち、頬が熱くなる。盃を取るよう侍女に耳打ちされて、美緒はハッと

我に返った。縋すがるように侍女を見たが、無表情に促されただけだ。

仕方なく手にした盃に、酒が注がれる。血の気の引いた顔で美緒は盃を見下ろした。

(……やっぱり……、む……無理……っ！)

これを飲んだら結婚が成立してしまう。今この瞬間に初めて顔を合わせた人と結婚するなんて、そんなの絶対無理無理無理!!

いくら相手が恰好よくても好みのタイプでも、勝手に決められて、お見合いもなしにいきなり結婚だなんて、絶対ありえない……!!

(あたし、まだ高三なのに……っ)

いったい何がどうしてこんなことになっちゃったの……!!

「——姫様」

有無を言わさぬ口調で侍女が囁ささやく。美緒は奥歯を噛かみしめ、盃を口許くちもとに運んだ。

ええい、こうなったらもうヤケクソよ!

ぐっと盃を干す。

喉を流れ落ちる酒の味は、ただ熱いだけで全然わからなかった。





## 第一章 身代わりの婚礼

きつかけは事故——だったのだと思う。

四月二十九日、昭和の日。

それは沢口美緒の誕生日でもあった。せっかくの休日なのに、誕生日のお祝いをしてあげるから、同居している年の離れた姉に、朝っぱらから連れ出されてしまった。

軽自動車で楽しみに高速をぶっ飛ばす姉を、美緒は横目で睨んだ。

「何よ！ あたしのお祝いじゃなくて、お姉ちゃんの趣味じゃないのっ」

「文句言わないの」

悪びれもせず、カラカラと莉緒は笑った。明るいブラウンに染めたベリーショートヘアで吊り眼め、気味の大きな瞳をくりくりさせて笑う様は、まさしく確信的いたずら猫といった風情。

溜息をつき、美緒は胸元に落ちかかる黒髪を意味もなくもてあそんだ。

莉緒は都内の設計事務所に勤めている。美緒とは七つ違いで、忙しい両親に代わって面倒を見てくれた。現在、両親は海外におり、美緒は姉とふたりで暮らしている。

からつとさばけた性格の莉緒は面倒見がよく、料理も上手い。大好きな姉だが、ひとつだけ困っ

た点があつた。何故か異性については大変に移り気なのである。もともと本人に言わせれば、『運命の相手を探している』とのこと。

学生時代から付き合つた男は数知れず、どれも三か月足らずの超短期で終わっている。ちなみにすべて莉緒からのサヨナラだ。それでいて恨まれることなく、なかには友人として今でも付き合いのある人物も複数いたりするのだから、ある意味それも人徳なのかもしれない。

今まで誰とも付き合つたことのない美緒には、そこらへんの男女の機微は正直謎だが……。

莉緒の現在の交際相手は、都内の病院に勤める勤務医だ。共通の友人の紹介という。人柄は悪くないのだけれど、これがまた筋金入りのオタクなのだつた。ただしアニメとかではなく歴史。それも戦国武将のマニアである。もつとも嵌はまつたきつかけはゲームだそうだ。

それにしても莉緒が彼氏の影響で、にわか歴史女と化したのには驚いた。莉緒はあまり人の影響を受けないタイプなのに、相性がいいということなのだろうか。あと半月もすれば付き合い始めて三か月。ひよつとしたら記録更新なるかもしれない。

「——なんで水無月みなづきさんは来ないの？」

「後から来るよ。メインイベントには間に合わないけどねー。臨月の奥さん抱えた先輩に当番医代わつてくれて泣きつかれちゃ断るわけにもいかないっしょ。だからあたしが代わりに武者行列の写真を一っぱい撮つといてあげるわけ」

「歴オタなんだから、真田まつりなんてもう何度も来てるんじゃないの？」

美緒たちが向かっているのは長野県上田市。毎年この日に行なわれる『上田真田まつり』を見に

行こうというのである。

「彼はそうでも、あたしは初めてだもん。お城も見たいしねー」

建築士だけあって、莉緒は古い建造物に関心がある。特に石垣とか石組みが大好きで、両親と南米に旅行した時など、インカ文明の石積みに感動のあまりうっとり頬擦りして気持ち悪がられたくらいだ。

「上田城には真田石さなだいしっていう、高さが二・五メートル、幅が三メートルもある礎石そせきがあつてね。三代目の真田信之のぶゆきが松代に移封いほうになるときに持つていこうとしたけど、ビクともしなかつたので諦めたっていう悲哀漂う逸話があるのよー」

「三代目ゆきむらつて幸村じゃないの？」

「幸村は次男。真田家三代目はお兄さんの信之だよ。あと、幸村つてのは後世になつて付けられた名前なまえで、本名は信繁のぶしげだから」

「はいはい」

にわか歴史女の講釈を適当に聞き流しながら、美緒はガイドブックを広げた。

「――武者行列に鉄砲隊演武かあ。ふうん……、けっこうおもしろそう」

「でしよでしよー」

「お昼はやっぱりお蕎麦そばだよな。あつ、この『みすゞ飴』つて美味おいしそう。おみやげに買いたい」

「……あんな、十八にもなつて色気より食い気なわけ」

ムカッとして美緒は言い返した。

「石積みにもスリスリするお姉ちゃんに言われたくないよっ」

「何をっ！ ああ奇跡としか思えない精妙な積み方が醸し出す、惚れ惚れするような色気がわかんないってゆーの、この子は!!」

「石に色気なんかあるわけないでしょー！」

「ふっ、これだからお子ちゃまは……、ん？ 渋滞してる……？」

前方で停車した車がハザードランプを点滅させている。速度を落とし、ハザードランプのスイッチを入れながら莉緒はぼやいた。

「もうちょっとでインターなのに。あーあ、こんなところで時間くつたら武者行列が見られなくなっちゃうじゃん」

「お姉ちゃんがSAサウスエリアで買い食いなんかしてるから——」

美緒が厭味いやみで反撃しようとした瞬間。後ろから、もの凄い衝撃が来た。弾みで飛び出した身体をシートベルトが押さえ込む。

同時にエアバッグが作動して、視界が真っ白になって——。

そして気がつくくと、美緒はまるで見知らぬ場所に倒れていたのだった。

「……つたた……。いったい何事……!!」

顔をしかめながら起き上がった美緒は、周囲の光景にぼかんとした。

「——え……? ここ、どこ……?」

美緒が座り込んでいるのは、荒れ果てた野原みたいな場所だった。

山がやけに近い。灰色の雲が垂れ込めた空をカラスがしわがれ声で鳴き交わしながら飛んでいる。

「お姉ちゃんは……?」

よろよろと立ち上がって辺りを見回したが、姉の姿はどこにもない。足元に置いたバッグも、膝に載せていたガイドブックもだ。

「そんな……つ、お財布も携帯も入ってるのに! ——お姉ちゃん! ねえ! どこなの!!」

ひよっとして先に意識を取り戻して、助けを呼びに行つたのかな……?」

「お姉ちゃん! おねーちゃんっ」

不安に襲われて大声で何度も呼んだが、返ってきたのは遠い<sup>「元」</sup>筈だけだった。

伸び上がって見回していると、農作業小屋みたいなものが遠くに建っているのが見えた。

「と、とにかく人を探そうっ」

美緒は急いで歩きだした。枯れたススキや雑草を掻き分けながら懸命に進む。

(でもなんであたし、こんなところにいるの!! お姉ちゃんと車に乗ってたのに……、高速にいたはずなのに……つ)

渋滞で止まっていたら、後ろから急に衝撃が来て。



(あれってきつと、追突されたんだよね……?)

その勢いで前の車にぶつかってエアバッグが作動して……、その弾みで車外に放り出されてしまったのだろうか。

(そんなはずない。シートベルトしてたし、窓は閉まってたもん……)

意識を失う瞬間まで乗っていた車は影も形もなく、それどころか舗装された道さえ見当たらない。周囲に見えるのは山と木立だけ。わけのわからなさに涙がこぼれそうになる。

焦って小走りに進んでいた美緒は、何かに足を取られて躓いた。あつと思つた瞬間、ものの見事にばったり倒れ伏してしまう。

「いったあ……。もうっ、さつきから何なのよ……。ひッ!？」

美緒が躓いたのは人間の身体だった。誰かがそこに倒れている。寝ているわけではないのは、カッと見開いたまま凍りついている眼球を見れば一目でわかった。美緒は尻餅をつき、慌てて後退つた。

「し、死んでる……!？」

死体など、お棺に入れられた祖父母のものしか見たことがない。鉛色の皮膚や、どろりと濁った眼球から、それが間違いなく死人なのだとすることはわかる。だが、いきなり死体に出くわした恐怖とは別に美緒は激しく混乱した。

(な、なんでこの人、こんな恰好してるの……!?)

美緒が蹶躓いた死体は、円錐形の黒い陣笠をかぶり、鎧を身につけていたのである。

鎧といっても胴の部分だけを覆う簡素なもの。確か『具足』とか言うのだと、姉から聞いたような気がする。

「下半身は股引に脚絆、素足に草鞋履きだ。ぎゅつと結んだだけの帯には短めの刀を差している。(こ、これって、『足軽』……の恰好だよね……!!)」

「ここって時代劇の撮影現場か何か!? でもこの人死んでるし……! あつ……、ひよつとして何かの事故? 口論の挙げ句、カッとなつて刺した……とか!?

ど、どうしよう、あたしまずいところに来あわせちゃった……!!」

本能的に逃げようとして走り出した途端、ふたたび足を取られて草むらに突っ込んでしまう。躓いたのはまたもや死体だった。ただし、人間ではなく今度は馬だ。

「……………ッ!!」

悲鳴を呑み込み、転がるように走り出した美緒は、目の前に広がった光景に愕然となった。

ゆるい傾斜を描いて広がっている野原には、人間と馬の死体が散乱していた。折れた槍や旗印もあちこちに転がっている。

「な……、なに……これ……!？」

とても現実とは思えなかった。こんな光景を見るとしたら、TV画面か映画館のスクリーンのなかだけのはず――。

(それともあたし……映画見てたんだっけ……?)  
違う。だって、匂いがある。

草の匂い。土の匂い。金臭いようなこの匂いは……きつと血の匂いだ。

ひゆう、と風が吹き、その冷たさだけでなく美緒の肌が粟あわた立った。

「やだ……っ。お姉ちゃん、お姉ちゃん……!! どこ……っ?!」

カチカチと歯を鳴らして咬くばいた刹那せつな、いきなり後ろ襟つかを掴まれて引きずり倒された。

「——なんだ、こいつ。おなじ女子おなじだぞ」

薄汚れた手拭いで頬ほっ被かりをした男が顔を覗き込む。続いて何人もの人間が周囲を取り巻いた。男だけでなく、女も子供もいる。皆一様に粗末な身なりで、顔や手足は泥で汚れていた。

鉞なたや鎌かま、鍬くわなどの農耕具を手にした者もいるが、農作業中とは思えない。彼らはそこらに転がっている死体から剥はぎ取ったらしい具足や着物、刀、槍などを、それぞれの両手いっぱい抱え込んでいた。

「御陣ごしん女郎じやうらうか？」

「どこかの草じゃねえけ」

「馬鹿言え、草がわしらなんぞに捕まるかよ」

言い交わす言葉もろくに理解できず、恐怖ばかりがつのる。

「は、離してっ」

必死に身を振まつても、がっちりと服を掴まれてしまつて身動きできない。

「こりや変わった着物だなあ」

「南蛮なんばん渡来たらいかもしれんの」

「こいつ あ高値で売れそうだ、剥ぎ取っちまえ」

一斉に寄つてたかつて美緒の服を脱がそうとしたが、ファスナーやボタンの外し方がわからないらしい。ただ乱暴に引っぱるだけだ。ジーンズを履いていたこともあり、美緒はなりふりかまわず手足を振り回して抵抗した。

「やだつ、やめてよ！ 離してっ」

「このっ、おとなしくしやがれ！」

拳で殴られた男が目を吊り上げ、美緒の髪を掴む。そこへ遠くから大音声が響いた。

「おまえたち何をしておる!! 乱取りは禁止だと知っておろうがっ」

「やべえ、黒鉄だ！ 逃げろ！」

美緒を取り囲んでいた農民たちは、戦利品を抱えて脱兎のごとく逃げ去った。

槍を手にとってきたのは、足軽よりはずっと立派な具足を身につけた武士だった。武士は辺りを見回し、後方に大声で呼びかけた。

「おーい、こつちにも死体があるぞ。荷車を回せ！」

そして、地面にへたり込んでいる美緒を見下ろして眉をひそめた。

「何じゃ、おぬしは。妙な恰好しておるのう……。——むっ、さてはどこそぞの草の者か!？」

「な、何ですかそれ。あたしはただの高校生……」

「コーコーセ？ 何だそれは。怪しい奴め。来い！」

助かったと思いきや、今度はギョロ目の髭面武士に有無を言わさず引つ立てられてしまう。白い

幕を張り巡らせた陣に連れて行かれると、ちようど中から何人かの武士が急ぎ足で出てきた。ギョロ目侍は割れ鐘のような大声を張り上げた。

「——殿！ 怪しい女を捕まえました。北条の間者ほつじようかんじややもしれませぬ！」

「わしは急用ができての……。詮議せんぎはそちに任せる」

先頭にいた、少々気弱そうな若い武士が、気もそぞろな調子で答えた。かしこまる武士の前を行き過ぎようとして、彼はふと足を止めた。後ろ手に縛られ、無理やり地面に膝をつかされた美緒を見下ろすなり、若い武士の顔に驚愕きようがくが広がる。

「そなた、ここで何をしておる……!! い、いやそんなはずがない。しかしこれは……ううむ」

「殿？ この者をご存じで？」

訝いぶかしげに問われた武士は、ハッと我に返るとしかつめらしい顔になった。

「う、うむ。実はな……、そやつはわしが使っている草なのだ」

「そうでございましたか！ ——女！ それならそうと何故さつさと言わぬ!!」

「いや、だからあたしは高校生で……」

「おお、それが合言葉であったか！」

結局誤解されたまま、美緒は『殿』と呼ばれる若い武士に従って歩かされることになった。縄は解いてもらえたが、前後両脇を武装した侍に取り囲まれてはとも逃げ出せない。

逃げたところでどこへ行けばいいのか、そもそもここはどこなのか、見当もつかないが……。

（あたし、どうなっっちゃうの……。お姉ちゃん……。どこ……。?）

茫然と見上げた空はどんよりと曇って、ますます重苦しさが増してゆくようだった。

その後、美緒は荷車に載せられて運ばれた。疲れが出たのか途中で眠ってしまった、気付いた時にはふたたび縛り上げられていた。悲鳴を上げる暇もなく頭にすっぽりと袋を被せられてしまう。

「――騒ぐでない。おとなしくしていれば命は取らぬ。わかったな」

押し殺した声は、あの若い武士らしい。美緒は必死に頷いた。

「よし。ついてまいれ」

両脇から腕を取られて歩かされる。何となく、どちらか女性のような気がした。建物のなかに入り、板張りの廊下を延々と歩く。何度も角を曲がって、かなり奥まったほうへ連れて行かれているようだ。

やがて座敷に入り、肩を押されて強制的に座らされた。ようやく頭から袋が外され、大きく喘ぎながら目を瞬いた美緒は、ぎくりと竦み上がった。目の前に床が延べられ、白い布を顔にかぶせた人間が横たわっていたのだ。

美緒を連れてきた武士がおもむろにその布を取り去る。現れたのは若い女の顔だった。雪のように冷たく白い肌。すっかり青ざめた唇。まだ亡くなって間もないようだ。

しかし美緒が驚いたのは、見知らぬ場所に連れて来られていきなり死人と対面させられたことだけではなかった。亡骸の顔が、自分にそっくりだったのだ。



一瞬、自分が死んでそこに横たわっているのかと錯覚したくらい、よく似ている。茫然と言葉を失っていると、若い武士が深々と溜息をついた。

「——どうじゃ。まさに生き写しであろうが」

顔きたくはなかったが、否定するにはあまりにも似すぎている。年頃も同じくらい。目を閉じた自分の顔など見たことはないけれど、それでも一目見ただけでそっくりだと感じた。もしも生きて顔を合わせたら、お互いぎよつとしたに違いない。

「……………このひとは……………？」

「わしの妹じゃ。名は滯みおという」

みお……………!?

自分と同じ名前だと知って、ますます気味が悪くなった。

そっくりなのは、まあいい。世界には同じ顔の人間が最低でも三人はいると聞く。だが、名前まで同じとなれば、何やら因縁めいたものを感じずにはいられない。

美緒は少女の亡骸をまじまじと見つめた。

畳の上に縁取りのあるごく薄い筵むしろみたいなもの（薄縁うすへりというのだと、後で知った）を敷いて横たわっている。身体を覆っているのは見馴みなれた布団ではなく、美しい織物で作られた搔卷かいまきみたいな着物だ（衾ふすまというのだと、これまた後で知った）。長い黒髪はところどころで結んで、頭上に置いた漆塗うるしぬりの箱に収められている。

改めて、強烈な違和感が込み上げた。

絶対おかしい。なんでこんな恰好で寝てるの？

大体、どうしてみんな着物を着てるのよ？ しかもこの恰好、現代の和装でも明治でも江戸でもない。もつと昔のものだ。

男の人はみんなちゃんまげだけど、女の人は髪を結い上げていない。後ろで束ねているだけだ。重ねた着物を幅の狭い帯で結び、その上に美しい模様の打掛うちかけを羽織った姿は……いわゆる戦国時代のファッションではなからうか。

——まさか、ね……!!

だってそんなことありえない。自分が戦国時代にいるなんて。

そんなの絶対ありえないよ……!!

どうにか現状を合理的に解釈しようと必死に考えたが、考えれば考えるほど頭はパニックの渦うずに巻き込まれてゆく。

そんな美緒をじつと見つめ、若い武士はとんでもないことを言い出した。

「おぬしには濡の身代わりとなつてもらおう」

「——はえ？」

とつさに理解できず、ぼかんと見返すと、武士は腕組みをして、しきりに頷いた。

「妹が死んだという知らせが届いたまさにそのとき、妹そっくりの女子おなごが現れるとは、とても偶然とは思えぬ……！ これを濡の身代わりにせよ、と、神仏しんぶつがおぬしを遣わしてくださったに違いない」

「な、何言ってるの!?」冗談じゃないわっ」

「むろん冗談などではない」

急に怖い目つきになって武士はすつくと立ち上がった。いきなり腰に差していた刀を抜き、美緒に突きつける。模造刀なんかではない、本物の真剣だ。禍々しくも妖しい光を放つ刃を顎下に突きつけられ、美緒は真つ青になってひくりと喉を震わせた。

「濡は真田様の養女となって嫁に出ることが決まっていた。約束を違えるわけにいかぬ。この縁組には我ら淵瀬家の浮沈がかかっておるのだ! 先代の汚名を雪ぎ、ふたたび真田様の家臣として返り咲けるかどうかは、濡! すべておまえにかかっておるのだぞ!」

「あ、あたしは美緒だけどつ…、その濡さんじゃありません!」

「いやおまえは濡だ。濡になるのだ! 事情を知ったからには、なつてもらわねば困る! 断るといふならこの場で死んでもらうほかないぞ」

武士の目つきはすつかり据わっていた。絶対本気だ。いやだと言ひ張れば、本当に殺すだろう。

(やだ……! こんなところで死にたくないよ……つ)

選択の余地など、最初からありはしなかった。

何が何だかわからないまま、戦国時代の姫君としての美緒の新たな暮らしが始まった。

信じられないし信じたくもないが、美緒は本当に戦国時代にいるらしいのだ。

(タイムスリップしちゃった……ってことだよね……)

原因は事故に遇ったショック——なのだろうか。

(たぶん追突されて……、その勢いで前の車にぶつかってサンドイッチになって)

そのショックで時空の狭間とか何か、そういうシューターかエアポケットみたいなものに落ちてしまったのだ。そうだ！ きつとそうに違いない……!!

そうとでも思わなければ頭がおかしくなりそうだった。どんなに考えたところで合理的な説明などつかないのだから。

眠りに就くたびに『今度こそ目が覚めますように』と祈った。そう、これは悪い夢。荒唐無稽な夢を見ているのだ……。だが、朝になって目覚めても美緒がいるのは相変わらずの戦国時代。白い小袖を着て薄縁に横たわり、布団ではなく衾をかぶつて——。

漆塗りの枕は綺麗だけど、木で作られているから当然固い。その感触にもいつしか慣れ始め——美緒はようやく『現実』を受け入れた。もう、そうするしかなかったのだ。

(帰る方法もわかんないしなあ……)

それに、事故がきっかけでタイムスリップしたのなら、元の世界に戻ったときに無事でいられるかどうか、はなはだ疑問だ。

(ひよつとして、戻った途端に死んじゃうとか……っ!!)

青くなつてぶるぶる首を振ると、間髪容れず叱責の声が飛んだ。

「姫様。食事中にそのように身震いなどするものではありません」

びくつと美緒は首をすくめ、端然と控えている女性をおそるおそる窺った。

「……ごめんなさい、葛葉さん」

「葛葉、とお呼びください。あなたさまは淵瀬家の姫君、わたくしはその侍女でございますゆえ」  
冷やかな視線に美緒はしょんぼりと肩を落とす。碗に盛られた玄米をもそもそ食べた。

膳に並んでいるのは野菜の煮物に漬物など。食べ慣れない玄米は硬くて、何度も噛んでようやく呑み込んだ。味噌汁もあるけど、食べ慣れた味噌汁とはどこか違う。何というか、糠味噌くさい。

滯姫付きの侍女だった葛葉は、そのまま身代わりの美緒の侍女兼教育係となった。平成の世に生まれ育った美緒にはこの時代の作法が全然わからない。衣食住のほとんどが未知の世界だ。

食事する間もずつと葛葉は目を光らせており、こまかく作法を直した。立ち居振る舞いから喋り方に至るまで、姫君らしく見えるよう徹底的に指導された。朝から晩までみっちり仕込まれ、疲れ果てて横になると目を閉じたとき勝手に爆睡だった。

(現代人で庶民のあたしに戦国時代のお姫様をやれなんて、どだい無理なのよーつ)

葛葉に叱られて泣きそうになりながら、美緒はぐつと奥歯を噛みしめた。

逃げ出そうとしたこともあったが、屋敷の奥から出ることすらできずに連れ戻されてしまった。警備はますます厳重になり、薙刀を持った侍女が昼夜を問わず部屋の周りに配置されている。

奥に訪ねてくる男性は、この屋敷の主である例の若い武士だけだった。名を淵瀬範時といい、年齢は二十五歳。淵瀬家の当主である。

彼は淵瀬家の事情について教えるほか、美緒がそれらしく仕上がっているかどうか確かめるため、

頻繁に様子を見にきた。

範時と話すうちに、今がいつなのか、どうにか把握することができた。

どうやら今は天正十二年——西暦で言うると一五八四年——らしい。織田信長が一昨年、天正十年に死んだと範時から聞いて計算したのだ。本能寺の変が起こったのが一五八二年だということは、かろうじて覚えていた。

(そっか……、信長はもういないのか)

ミーハー的にちよつとがっかりする。たとえ生きていようと、会えたとは思えないが。

そして美緒がいるのは信濃国しなのくに、つまり現在の長野県らしいのだが、縁のない土地なので、地名を聞いても美緒にはさっぱりわからなかった。ただ、淵瀬は真田の家臣だそうなので、美緒が姉と一緒に向かっていた上田市の付近ではあるのだろう。

「——あの。真田といえは」

「うん？　なんだ」

「やっぱり幸村……ですかっ……!?!」

「幸村？　はて、そのような御方おかた、真田家におわしたかのう」

範時は訝いぶかげに首を捻ひねった。

(あ。幸村は後世になって付けられた名前だっけ。本名は、えーと、……何だったっけ?)

考え込んだ美緒は、姉と交わした会話の記憶をたどり、ぼんと手を打った。

「あつ、そうそう。信繁のぶしげだ！」



「信繁？ 信玄公の弟君、武田信繁殿ならずいぶん昔、川中島の激戦で討死されたが」

（あれっ、違つたっけ??）

姉の講釈をちやんと聞いとくんだつた……、と今になつて後悔する。

「今の御屋形様は安房守昌幸様じゃ。ご嫡男は信幸様。そなた、織田様が亡くなられた後のことなど、妙によく知つておるくせに、近場のことはさっぱりじゃな。まだらぼけかのう」

「ぼけてません！」

頭に来て美緒は言い返した。途端に扇の先端でべちりと頭を叩かれる。

「叫ぶでない。武家の女子はもつと落ち着いておるものじゃ」

葛葉が目を光らせていることもあり、しぶしぶ美緒は頭を下げ、申し訳ございませんと謝つた。

「戦に巻き込まれて頭でも打つたのであろう。えらく傾いたなりしておつたし、西国あたりから流れてきた御陣女郎かのう」

「御陣女郎つて何ですか？」

「戰場近くで侍相手に春をひさぐ女子のことじゃ」

春をひさぐ、つて……、売春のことだよね……!!

「あ、あたしはそんなんじゃありませんっ」

「怒鳴るな」

またもやべちつと扇で叩かれる。こほんと葛葉が咳払いをした。

「——殿。おそれながら申し上げます。わたくしの見るところ、そのお方がどういふ出自であれ、

遊び女の類たぐいではないと思われませんが」

「生娘まわすめか？」

「おそろく……」

真面目な顔で葛葉は頷いた。風呂や着替えのときにやたらじろ見られてるなあと思っていたが、そんなことを確かめられていたとは心外だ。美緒は頭をさすりながら、むううと口を尖とがらせた。  
(ふんっだ、どうせ彼氏いない歴十八年ですよーだ)

彼氏を取つかえ引つかえしているモテまくりの姉が反面教師にでもなったのだろうか。逆に美緒は異性に対して今まであまり興味を抱くことがなかった。

(なのに、いきなり嫁に行けだなんて……！)

「……あの、範時様」

「兄上と呼べ。おぬしはわしの妹、滯とどみのだぞ」

「そのことなんですけど……。いくら顔が似てたってやっぱり無理がありません？ もうおわかりでしょうけど、あたし、武家の娘じゃないですし」

「葛葉のおかげでだいぶさまになって来たではないか」

「こんなの付け焼き刃ですよ！ すぐにボロが出ますって」

「心配せずともよい。病で高熱を発したせいで、少々言動が怪しくなっていると伝えておいた。葛葉よ、おまえもよく気をつけて取り繕うように」

「かしこまりました」

葛葉は表情も変えずに頭を下げる。美緒は焦って言いつのつた。

「誰か他にいないんですか?! 似たような背格好の子なんて、探せばいくらでも……」

「いや、そなたでなければだめだ。すでに真田様とは対面を済ませている。何が何でもそなたが真田様の養女となつて嫁に行かねば、我が淵瀬家の再興も叶わぬのだ!」

また範時の目つきが血走つてきて、美緒は顔を引き攣らせた。この話題になると、毎度彼は異様に昂奮する。

「あの……っ、それって一体どういう意味なのよ——ですかっ?!」

範時は我に返つた様子で、ほけつと美緒を眺めた。

「ん……? 話してなかつたか?」

「あたしが聞いたのは、濡姫として真田家の養女になつて嫁に行けということだけですっ」

それだけでも、すでに充分ややこしい。

「む……、そうだったか。我が家の恥とはいえ、身代わりを務めてもらうからには話しておかねばなるまいのう」

範時は扇の先端で額を掻き、物哀しげな溜息をついた。

「そもそも亡くなった父上が、すべての元凶じゃ……」

信濃国の国人（在地領主）であつた淵瀬家は、かつては武田氏の陪臣（家臣の家臣）だつた。だが、武田氏の滅亡に伴つて主家も離散してしまい、紆余曲折の末、真田氏に仕えるようになった。

戦で手柄も上げ、主君の覚えもめでたくなってきた矢先のこと——、当主であつた範時の父が、

こともあろうに密懷騒動を起こしてしまふ。

「密懷？ 何ですかそれ」

耳慣れぬ言葉を聞き返すと、範時はしかめつ面で答えた。

「他人の妻と情を通じることだ」

（あ、不倫のことね）

「密懷は御法度。父は妻敵討ちにあつて殺された。相手の女性共々な」

「えっ!? そんな……」

「当然であろうが」

不倫したら両方とも殺されちゃうの!?

美緒は青くなつた。改めて、現代の常識が通用しない世界なのだと怖くなる。

範時が跡を継ぎ、真田家の家臣として残ることはできたが、お役目はすべて解かれ、所領も半分

召し上げとなつてしまった。

長らく出仕も差し止めだったが、何でもしますから使つてくださうという嘆願がようやく実り、

小荷駄隊（現代で言う輜重部隊）や嵐子・黒鍛（土木作業や戦死者の收容作業などを行なう）の指揮を任されるようになった。

「無論それも大事なお役目。しかし弓取の家（武士のこと）に生まれたからには敵と戦つて手柄を

上げたい！ そして取り上げられた先祖伝来の領地を返していただかねばならぬ。ならぬのだ！」

「殿」

血走った目をぎらつかせて叫んだ範時は、葛葉の冷静な声で我に返って座り直した。

「——というわけで、そなたの順番なのだよ、滯や」

「意味わかんないんですけど……っ」

「だからそなたが真田様の養女になって嫁に行ってくれば、召し上げられた所領しよりょうを返してもらえるのだ！ わかったならつべこべ言わずおとなしく嫁に行けーっ」

「そんな時代錯誤なっ」

いや、まさにその『時代』真っ只中ただなかだった……。

眩暈めまいがしてきた。疲れと緊張が溜たまっていたのだろう、そのまま気が遠くなつて美緒はばたきと倒れ伏した。

気がつくくと褥しとねに寝かされて、濡ぬらした手拭いを額に載せられていた。見上げた先に見える天井板。やっばり、夢から覚めない。

「気が付かれましたか」

覗き込む葛葉の顔は、相変わらず冷やかな無表情だ。

「少しお熱があるようですね。このままお休みください。後で粥かゆでも持つて来させましょう」

「……葛葉」

「はい」

「あたしの結婚相手って、誰……?」

「藤波家のご当主様と伺っておりますが」

「どんな人?」

「さあ。お会いしたことはございませんゆえ。詳しいことは真田様がお話しくださるでしょう。今はとにかく当家の姫として怪しまれない程度の作法を身につけてください」

「無理だよ、そんなの……っ」

じわっと目頭が熱くなる。目許めとを手で覆って奥歯を噛みしめていると、葛葉が感情に乏しい声で呟くのが聞こえた。

「できなければあなた様だけでなく、範時様、いえ、淵瀬の一族郎党すべてが無事では済みません。それでもよろしゅうございますか」

「……どういう意味よ」

葛葉はうつすらと冷たく微笑した。

「当然でございます。御屋形様を謀たばかるのですよ? 真相が知れば淵瀬家は今度こそ改易かいえきされる」

「改易って?」

「所領や屋敷を没収されることです。そうなったら牢人ろうご(浪人)となり、新たな主君を求められない。それで済めばまだしも、御屋形様のご立腹がそれで収まらなければ切腹あるいは処刑となってもおかしくはないのですよ」

無表情な顔で淡々と言われ、美緒は慌てて起き上がった。

「そんなつ、嘘でしょ!?!」

「嘘なものですか。すでに淵瀬の滯姫が真田様の養女となって嫁ぐことを、藤波家は承諾しております。あなたのわがままは三つの家に影響を及ぼすことになるのですよ。それをよくお考えになってください」

「わがままって……、あたしは赤の他人なんだよ!?!」

「その、どこの馬の骨とも知れぬ赤の他人のあなたを、範時様は庇護してくださったのですよ？ 考えてもごらん下さい。淵瀬の侍に拾われなかつたらどうなっていたか……。まず間違いなく身ぐるみ剥がれて辱められ、人市で売り飛ばされていたでしょうね。それとも、そのほうがよかつた、と?」

クス……、と冷ややかに葛葉は憫笑した。

「戦続きの世の中で、あなたのような無知な小娘がひとりで生き抜けますかしら、ね……」

「そんなのっ……」

やってみなければわからない、とは言えなかつた。死体から目ぼしいものを剥ぎ取っていた貧しい身なりの農民たちの姿が思い浮かぶ。掴みかかられたときの恐怖。どんよりした目で、ただそれを眺めていた女たち。今あそこに連れ戻されたとしたら……。

ぞくつと鳥肌が立つ。きつと、置いていかないと泣きわめき、葛葉や範時に縋ってしまいうに違いない。ぎゅつと握り締めた拳が震えた。葛葉は憐れみとも蔑みともつかない微笑を浮かべた。

「さあ、今日はもうお休みなさい。わたくしが万事うまく取り計らつてさしあげますよ」

ふたたび横になり、美緒は目を閉じた。

逃げ出したい。でも、逃げてどこへ行けばいいの？ 行くあてもなければ知り合いもない。この世界で美緒はたったひとり。ひとりぼっちだ。

まるで、真つ暗な夜の海に投げ出されたみたい。手に触れるものなら何にでもしがみ付きたくなる。

それが何なのか、わからなくても――。

葛葉の特訓のおかげで、どうか姫君らしさを取り繕うことができるようになると、さつそく美緒は真田家へ送られた。

範時は涙を浮かべて「よろしく頼む」と頭を下げた。どうもすつかり美緒を藩姫と取り違えてしまっているようで、本気で別れを惜しまれるとこちらまで寂しいような気分になって困った。

（まあ、悪い人ではなかった、よね……）

少々感情の浮き沈みは激しくても、根は善良そうな人物だった。淵瀬家の再興が叶わぬかぎり結婚しないと願掛けまでしていた。実際彼は二十五なのに未だ正室はおろか側室もないそうで、範時の後ろで見送った家臣たちの顔にホツとした表情が浮かんでいたのは見間違ひではないだろう。

本物の藩姫が亡くなっていることを知っているのは、家臣のなかでもごく一部の側近と葛葉を始



めとする数人の侍女だけだ。見送りの家臣のほとんどは美緒が滯姫本人だと思い込んでいる。

奥に乗せられた美緒は前後を護衛の武士に挟まれて、肅々と上田城に入った。奥の座敷に通され、美緒は緊張しながら周囲を窺った。

(新しいお城だけあって、さすがにびかびかだわ……)

範時に聞いた話では、上田城は去年から築城が始まって、まだ完成していないとのことだ。とりあえず居住部分は先に仕上げたのだろう。釣簾の下がった上段の間には薄縁が敷かれ、床の間には水墨画が掛けられている。香炉から薄く煙が立ちのぼり、ほんのりと良い香りを漂わせていた。

障子の向こうから足音が聞こえ、葛葉の合図で美緒は急いで平伏した。上段の間から深みのある、それでいて重々しくはない気さくな声が出た。

「滯姫か。そうかしこまらず顔を上げよ」

「は、はい……」

おそろおそろ顔を上げると、胡座をかいた男が柔和な笑みを浮かべていた。

(この人が真田昌幸……！)

美緒の乏しい知識で把握しているのは、この人物が徳川軍を二度にわたって打ち負かしたということくらいだ。だが、今の時点ではまだその出来事は起こっていない。

(思ったより若いわ)

せいぜい四十歳くらいだろうか。まだ三十代かもしれない。けっこうな美男子で、気骨を感じさせる精悍な顔立ちだ。何となく五十代くらいの人をイメージしていたので面食らっていると、昌幸

は目を細めてニヤリとした。

「どうした？ わしの顔を忘れたか。まあ、一度しか会ってはおらぬからのう」

「い、いえ、失礼いたしました！ その……病で熱が続きました、少々頭がぼんやりしております。ひらにご容赦を」

葛葉が考えたもつともらしい言い訳をして、ふたたび平伏する。昌幸は闇達な笑い声を上げた。

「よいよい。それより病のほうはどうなのじゃ。瘡かさを患おとっていたそうだが」

「はい、もうすっかりよくなりました」

「範時は息災か」

「はい」

ドキドキしながら美緒は昌幸の問いに答えていった。教科書に出てくるような歴史上の人物と喋しゃべっているのかと思うと、非現実感で本当に頭がぼうつとしてくる。

訊きかれるであろうことをあらかじめ範時や葛葉が考え、何度も遣やり取りの練習をしたかいあって、口ごもることなく答えられた。

「そなたには真田の娘として藤波崇晃たかあきの下へ嫁いでもらう」

「はい……。承知しております」

「忙ましないことですまぬが、すでに準備は整っておるゆえ、差し障りがなければ明日にでも出発してもらうことになるだろう」

「こちらの都合で遅くなりましたから……」

「病み上がりには無理は禁物だな。ゆつくり身体を休めなさい。夕餉ゆづけのときにでもまた会おう」  
にっこり笑うと昌幸は太刀持ちの小姓こしやうを従えて出て行った。平伏していた美緒は障子が閉まる音にホッと息をついた。

思った以上に緊張していたらしく、このまま畳に突っ伏してしまいたくなかったがそうもいかない。美緒は己を叱咤しつたして気合を入れ直し、案内の侍女の後に続いたのだった。

一方、座敷を出た昌幸は、庭の前栽せんざいを眺めながら何やら思案していた。そこへ、前髪の残る利発そうな顔立ちの少年がひよこりと現れる。

「――父上。濡姫が到着されたと聞きました」

「弁丸べんまるか。ああ、今日通りを済ませてきたところだ」

「快復されたそうで、よかったですね。後で、母上と一緒に私もお会いしてよろしいでしょうか」

「ああ、かまわぬが……」

ふと昌幸は言葉を切り、首を傾かしげた。

「父上？ どうかさいますか」

「気のせいかもしれぬが……、確かめている暇はなさそうだな」

思案顔を顎を撫でる父を、弁丸はきよんとした顔で見上げている。昌幸はニッと笑って息子の頭を荒っぽく撫でた。

「わっ……、父上？」

「まあよいわ。この婚姻で藤波の白鳥はくどもを従えることができれば、こちらの目的は達せられる。

とはいえ目付は必要だな」

不敵な顔で笑う父親を見上げ、弁丸は溜息をついた。

「父上……。また悪巧みしてらっしゃいますね？」

「弁丸よ。真田家存続のために考えを巡らせることを悪巧みとは言わぬぞ」

きっぱりと言われ、「失礼しました」と弁丸は頭を下げた。昌幸は弁丸についてくるよう命じ、奥とは別方向に向かつて大股に歩きだした。

一息入れると美緒は養母となる昌幸の正室に挨拶しに行つた。正室の山手様はおつとりと臆たけた美女で、緊張しきつた美緒を優しくいたわってくれた。

山手様の傍らには十一か十二歳くらいの男の子がいて、昌幸の次男・弁丸だと紹介された。

「お会いできて嬉しいです、藩殿」

にこつと無邪気に笑いかけると反射的に頬がゆるんだ。母親に似て目がぱっちりとした美少年だ。元服前なので鬘は結わず、伸ばした髪を後頭部でひとつに括って垂らしている。

（うわあ、可愛い……!）

こんな弟が欲しいなあと思ひ崩れ、あ、義理の弟なんだわと思ひ返す。

「藩殿は姉上と同じくらいのお年ですね。せっかくなきょうだいになったのに、すぐに嫁にいかれてしまうなんて残念です」

溜息をつく息子を見やり、山手様はやわらかな笑みをこぼした。

「この子の姉……、於国は一昨年嫁ぎましてね。慕っていたので、とても寂しがったのですよ」  
「そうでしたか」

「於国の袖に取りすがって、行つてはいやだと泣きましてねえ」

「母上！ 何もそんなことまでばらさなくても」

真つ赤になつて抗議する弁丸の様子が可愛くて、美緒はさらに笑み崩れた。そんな美緒をちよつと恨めしげに見やつて弁丸は嘆息した。

「ああ、もう。新しい姉上にいいとこ見せようと思つたのに、母上のせいで台無しです」

「そんなことありません！ あ……わ、たしも、あ……つにを頼りにしていましたから……つ」

いろいろ言い間違えそうになつて、つかかえてしまったが、さいわい聞き咎められずに済んだ。  
弁丸も山手様もしんみりした顔で頷いている。

（はあ、危ない危ない。うっかり『姉』つて言っちゃうところだったわ）

しかし頼りに思っていたのは本当だ。よく喧嘩もしたが、結局のところ何につけても氣の回る莉緒に甘えていた。

（お姉ちゃん……どうしてるんだらう。無事なのかな……）

そう思うとまたじわりと涙が込み上げてくる。慌てて袖で目許を押さえると、山手様がすつと座を立つて傍らに寄り添い、優しく肩を抱いてくれた。

「病も癒えたばかりというのに、さぞ心細いでしょう。あなたは真田の娘になったのだから、でき

るかぎりのことはするわ。頼りに思ってくれていいのよ。心配なことがあれば、遠慮せずわたくしに何でも相談してちょうだい」

「あ……ありがとう……ございます……」

こんなに優しいことを言われたのは、この時代せかいに来て初めてだ。抑えようとしても次から次へと涙がこぼれ落ちてしまう。

「ごめ……なさい……っ」

「いいのよ。ちゃんとしてあげますから、心配しないで、ね」

あやすように優しく背を叩かれて、美緒は嗚咽おえんをこらえて領いた。嫁いだ姉との別れを思い出したのだろうか、弁丸も目を潤ませている。

初めて接した優しさ感激する一方で、自分が彼らを騙だましているのだという罪悪感に身をつまされた。名目上の養女にすぎない自分を優しく気遣ってくれる山手様にも、無邪気に笑顔を見せてくれた弁丸にも、申し訳なくてはならなかった。

結局、山手様の勧めで美緒は上田城に三日間滞在した。その間に嫁ぎ先について昌幸から改めて説明を受け、用立ててもらった嫁入り道具を見せられた。

小袖、打掛、帯などの衣類、茶器や巻物、化粧道具一式の収められた玉手筥たまてばこ、貝合わせの貝を詰めた桶おけ、お香や硯箱すずりばこ、寝具などなど、どれも立派すぎて、現代人の美緒には触るのももつたいない

くらいだ。

山手様は美緒の短い髪（高熱のために切ったと言いつつ追加してくれた）を気の毒がって、鬘かむしをいくつか追加

美緒の髪は三つ編みできるくらいの長さはあるのだが、この時代の女性としては短すぎるため、鬘を付け足している。もつとも、地毛だけで足りる人はやはり少ないらしく、鬘はわりと普通に使われているようだ。

せっかくだからと弁丸に誘われて、城内も少し見学させてもらった。弁丸は嫁いでいった姉や別の城を任されているという兄についても話してくれた。

「兄上は岩櫃城いわびつの城代を務めているんですよ」

澄んだ少年の声で、弁丸は自慢そうに言った。話の端々から弁丸が兄をとっても慕っていることが伝わってきて微笑ほほえましい。

「弁丸様はお兄様が大好きなんですわね」

「もちろんです！ 兄上はそれは優れた武士もののふですから。背は六尺一寸もあって、男前だし、槍も刀もそれは見事に使いこなすんですよ。頭もいいし、思慮深く、胆力があって……」

目を輝かせて弁丸は兄自慢を始めた。兄の信幸は十九歳。真田が武田氏から独立すると、重要な拠点のひとつである岩櫃城の城代に任じられた。

（六尺一寸っていうと……、確か一尺は三十センチくらいだっけ？）

とすると一八三センチくらいだろうか。現代日本でもかなりの長身である。この時代は小柄な人

が多いから、さぞかし目立つことだろう。

「私も兄上のような立派な武士になって父上のお役に立ちたいです！ ……しかし、なかなか背が伸びず」

はあ、と切なそうに弁丸は溜息をついた。

「これから伸びますよ」

「だといのですが。兄上が私の年には、もっと大きかったらいいんですよ……」

確かに弁丸は、十二歳にしては少々小柄な気もする。

(あ、でも十二歳っていつでも数え年なのよね)

それに、昔はお正月に一斉に年を取ったはずだ。だったら実際には十一歳、下手をすれば十歳くらいかもしれない。少しでも大きく見せようと言うのか、ぴんと背を伸ばして先を行く弁丸が可愛くて、美緒は忍び笑った。

(——やっぱり弁丸様が後の幸村……なんだよね)

正しくは信繁だが、それも元服後の名乗りだから、今の時点では幼名の弁丸だ。誰も知らなくて当然である。きつと、真田がかつて仕えていた武田氏の家中で評価が高かったという武田信繁にちなんでつけられることになるのだろう。

(でも……、真田家って後に家族が敵味方に別れることになっちゃうんだっけ)

それを考えると切ないが、こうして無邪気に兄自慢する少年の弁丸を見てると全然実感がわかないし、正直今はそんなこと考えたくなかった。





わずかな時間ではあったが、美緒は山手様や弁丸のことがとても好きになってしまっていた。ずっと幸せでいてほしいと願わずにはいられない。

美緒が輿に乗って上田城を去るときも、ふたりは本当の家族のように名残を惜しんでくれた。しかし昌幸の期待顔を見れば、この結婚が政略であることがいやでも思い出されて緊張し、気が重くなる。

別に何か命じられたわけではない。言われたのは、両家の友好を保つよう努力してほしいということだけだ。

この結婚は、古くからの有力土豪出身の国人領主である藤波家一族を真田の家臣として取り込むためのものだ。弁丸の姉・於国もまた国人衆の小山田家に嫁ぎ、それによって小山田は真田の家臣となった。この結婚の目的も同様だ。

花嫁行列は藤波家の所領の境目で、先方からの迎えに引き渡された。ところが早速ここで一騒動持ち上がった。侍女たちは全員帰れというのである。

気色ばんで遣り取りする双方の家臣たちを、美緒はびくびくしながら輿の窓から覗き見た。

真田家から付けられた侍女はともかく、葛葉まで返されてしまつては非常に困る。姫君どころか、そもそもこの時代の人間でもない美緒が頼れるのは葛葉だけだ。彼女とて、美緒が遥か四百年以上も未来から来たなんて知らない。知ったところで信じはしないだろうけど……。

短時間で無理やり詰め込まれた礼儀作法など、安っぽいメッキみたいなもの。葛葉がフォローしてくれなければあつというまに剥がれ落ちてしまう。

「そんなにいやなら姫君ともども引き返してくれていいんだぜ」

いきなりぞんざいな声が聞こえてきて、美緒は視線をきよろきよろさせた。だが、ちょうど死角に当たっているのか、喋っている者の姿は見えない。真田の家臣が憤りの声を上げた。

「無礼なっ……！ 真田様の姫君を何と心得る!!」

「慌てて仕立てた養女じゃないか」

「養女だろうが何だろうが、当家の姫であることに変わりはない。相応の敬意を払うのは当然であるろう」

「こっちは別に嫁をくれなんて頼んじやないぜ。もらつてくれと頼み込まれたんで仕方なくもらつてやるんだ」

「何だと……!?!」

露骨な嘲り声に真田の家臣たちも殺気立つ。今にも刀を抜いて乱戦が始まりそうだ。身代わりとはいえ、美緒は両家の絆きずなとなるべく遣わされた花嫁。黙って見ているわけにはいかない。

「——あの……っ。待つて……、お、おま、ち、くださいっ……」

窓の棧さんに張りつくようにして美緒は声を上げていた。

突然、時空を超えて戦国時代に放り込まれ、わけがわからないままに流されてここまで来てしまった。それでも美緒には淵瀬と真田、双方から託された役目がある。

思い詰めた顔で、涙ながらに頼むと頭を垂れた淵瀬の『兄』、範時。武田氏が滅び、その旧領を巡って徳川・北条・上杉が相争うこの地で真田家が置かれている厳しい状況を率直に語ってくれた

昌幸。そしてわずかな時間でも『家族』として遇し、氣遣つてくれた山手様と弁丸。

頼れる人は誰ひとりいない孤独そのものの存在だった美緒は、いつのまにか多くのものを受け取り、そして託されていた。

望んで負ったものではないけれど、今の美緒にはそれだけが、この世界で生きるよすが。ここにいることの『意味』なのだ。

美緒の声に、輿の前にいた真田の家臣がハツとした顔で振り向く。美緒は緊張でかすれ気味の声を必死に振り絞った。

「け、喧嘩しないでください。わた……くしは、こちらに、お、お嫁に来たのです。争うために来たのでは、ありません……つ」

家臣たちが向き直つて恭しく膝ひざを付く。

「侍女を帰せとおっしゃるなら従いましょう。ただ……、ひとりだけ許してはいただけませんか。実家から連れてきた侍女だけは連れていきたいのです」

慣れない言葉づかいで、たどたどしく、それでも懸命に訴える。しばし間があつて、ぶぜん無然と鼻を鳴らす音が聞こえてきた。

「ふん。まあいいだろう。淵瀬の侍女だけは許してやる。他は帰れ」

ざわざわと人が動き始める。どうにか怪しまれずに仲裁できたことにホツとして、輿のなかで美緒はへたり込んだ。

やがて行列の引き渡しも済み、真田家から付けられた警護の責任者が悔しさを隠しきれない様子

で挨拶をした。

「御屋形様がすぐにもお取り計らいくださるはず……!! 姫君、しばしご辛抱のほどを」

「皆様に、よろしくお伝えください……」

ゆらりと輿が動きだす。真田の武者たちは、花嫁行列をずっと見送ってくれていた。彼らが視界から消えると、どつと心細さが押し寄せた。そつと窺うと、輿の傍らを市女笠をかぶった葛葉が歩いていた。

笠の陰になつて顔は見えないが、もしあのとき美緒が声を上げなかったら、葛葉も他の侍女たちと一緒に帰ってしまったのだろうか……。

いや、彼女は美緒が身代わりであることがバレないように見張る監視役を範時に命じられている。どうかして付いてきてはくれただろう。

そう思いたいけれど、フォローはしてくれてもいつも無表情な葛葉には、どうしても親しみを抱けなかった。できることなら優しい山手様にすべてを打ち明けて助けを求めたいくらいだ。それが不可能である以上、ひとりだけ選ぶとしたら葛葉を残すほかなかった。

花嫁行列は肅々と進み、夕刻になつて藤波一族の本拠である藤波屋敷へ入った。

櫓門の前には篝火が焚かれ、白帯を締めた兵士が警護についている。美緒は輿に乗ったまま輿まで連れて行かれた。邸内には迷路のように築地塀が巡らされてまっすぐ進めず、大小様々な門もあった。

(藤波屋敷は攻めにくいと昌幸様が言つてたけど……、確かにこれじゃ難しそうね)

行きつ戻りつしている間に鉄砲や弓矢で討ち取られてしまふだろう。

藤波家は、藤波郷と称される山間に開けた土地に古来から根を張っていた豪族である。昔は山賊まがいのこともしていたらしいが、都から追われた公卿や武士を匿<sup>かくま</sup>つてもいたそうだ。

事実かどうかわからないが、政争に敗れた親王が娘とともに藤波郷に滞在し、父親が亡くなったあと娘は藤波家に縁付いた。それが現在の当主の先祖で、つまり藤波家は皇室ゆかりの一族なのだというのが彼らの主張である。

たぶん眉唾<sup>まゆづ</sup>な話ではあれ、藤波家が都から様々な文化人を招いては教えを請い、様々な書物を集め、かなり教養高い人々であったのは事実らしい。

だが、時代は乱世、敵味方が入り乱れ、戦続きの世の中だ。皇族の血筋を主張する藤波一族は、大名の家臣となるのをよしとしなかった。しかし所詮<sup>しよせん</sup>は地方豪族、兵の数では太刀打ちできない。

そこで、昔から余所者<sup>よそももの</sup>を庇護し、取り込んできた強みを生かして、藤波家は腕の立つ流浪<sup>りゅうりやう</sup>の忍びを集め始めた。そして彼らを使って領民たちに訓練を施し、数世代かけて『白鳥衆<sup>はくちゅうしゆ</sup>』と称する独自の忍び集団を形成した。

彼らはどの大名にも属せず、期間を区切つて金銭で仕事を請け負った。戦忍びとして従軍するだけでなく、各地を回つての情報収集や諜報<sup>ていほう</sup>活動、調略（内通者を得るなどして相手方に揺さぶりをかけること）などを行なう。

彼らは武田氏が信濃を侵攻すると、形としてはその軍門に下り、信玄お抱えの忍び、三ツ者と連繫<sup>けん</sup>して働いていたという。だが、息子・勝頼<sup>かつらよ</sup>の代になると、反りが合わなかったのか、さつさと抜

けてしまった。以来、彼らは時勢を読んで巧みに大名間を渡り歩き、所領を守っている。

これまで彼らと真田家との関わりは薄かった。藤波一族は領土拡張の意図を持たず、所領が戦略的な重要性を持たない位置にあったからだ。彼らが武田氏に臣従している限りはいわば同じ家中でもあり、さほど警戒の必要もなかった。

だが、武田氏が滅び、徳川・北条・上杉の勢力がぶつかりあう状況では、山間とはいえ上田からさほどの距離でもない藤波一族が敵方に付かれては厄介だ。特に、上野国・沼田領の帰属を巡って争っている北条氏が、白鳥衆に接触を図っているという噂も流れており、昌幸としては膝下に火種を抱えることは絶対に避けたい事態なのだった。

藤波家の現当主・崇晃と顔を合わせた折にそれとなく探ってみると、今のところ北条方の仕事は請け負っていないようだった。しかし鶴呑みにできないし、安心してはいられない。

足元の火種を確実に消し去るべく、昌幸はこちらにつかないかと崇晃を誘ってみた。臣従の上、改めて所領を安堵しよう。だが崇晃は、ご息女でもいただけなら考えてみてもよいと不遜に言い放つて去っていった。要するににべもなく蹴られたわけだ。

家臣たちは激昂し、いっそこちらから仕掛けて藤波一族を滅ぼしてしまおうとまで言い出した。だが、彼らの領民は多くが高戦闘能力を持っているという。攻め滅ぼすことが出来たとしても、こちらにも甚大な損失を被るであろうし、有能な兵を失うのはいかに惜しい。

そこで昌幸は崇晃の言葉を逆手に取り、望みどおり娘を嫁がせようと打診した。これには藤波家も驚いたようだが、やがて了承の返事が来た。

あとは誰を嫁がせるか選べばいい……のだが、あいにくこのとき昌幸には崇晃に釣り合う年齢の娘がいなかった。二十四歳の崇晃に対して、昌幸の手元にいる未婚の娘は最年長でも九歳だった。

政略結婚とはいえ、双方が納得しなければ成立しない。九歳の娘はあっさり断られた。崇晃は独り身で、未だ跡取りがない。嫁にもらうならすぐにでも子を産める年齢の者がいいと言う。

やむなく家臣の娘を養女にして嫁がせようとしたが、ちょうどよさそうな年頃の娘はすでに婚約が決まっていたり、親が渋ったり、崇晃側から断られたりしてなかなか決まらなかった。

結局、真田の家臣になる気など端からないので、と悩み始めた矢先、先代の不始末で出仕停止を食らっていた淵瀬範時から、当家に十八になる娘がおりますが……とおそるおそる申し出があった。澪姫である。

淵瀬澪を真田の養女として嫁がせたいがどうか、と打診したところ、ついに承諾の返答があった。これで昌幸は手練の忍びを抱える藤波一族を配下に加え、淵瀬家も晴れて返り咲くことができ、万々歳、のはずだったのだが――。

嫁入りの日取りも決まり、着々と準備が進むなか、澪姫は急に体調を崩して寝込んでしまった。そしてそのまま回復することなく儂はかなくなってしまったのである。

美緒が時空を飛ばされて戦国時代に放り出されたのは、戦場の後始末を任された範時の下に澪姫の訃報が届いた、まさにその瞬間のことだった。



婚礼の儀が進みつつある藤波家の座敷にて、美緒は手にした盃さかづきを蒼白な顔で見つめていた。

覚悟を決めたつもりではあったが、いざそのときとなれば、どうしても気持ち揺らいでしまう。そもそも納得なんて全然していかない。にっちもさっちもいかないこんな状況では、そうする以外に生き延びるすべはないと無理やり自分に言い聞かせてきただけなのだ。

『引き渡し』と呼ばれる第一膳には搗栗からり、熨斗鮑のしあわび、昆布が各五切れずつ載っている。一度干した盃には、すでに二杯目が注がれていた。式三献しきさんけん——いわゆる三三九度の真つ最中だ。震える指先で盃を口許くちもとに持っていき、二杯目を干すと、花婿も干す。

二順目の盃が済むと第二膳の『打躬うちみ』。載っているのは鯉こいの刺身だ。そして三杯目が同様に繰り返された。三順目の第三膳は『腸煎わたいり』で、鯉の腸を味噌で煮たものだった。

こうして式三献しきさんけんは滞りなく終了し、婚礼の儀は終わった。

どうしようどうすればと焦り悩みすぎた反動か、美緒はすっかり頭がぼーっとなってしまった。葛葉に促され、美緒は案内に従って奥まった建物へ移動した。

式が始まってからずつと祟晃がもの思わしげな顔で美緒を眺めていたことなど、まるで気付きもしないまま……。

この続きは製品版をご購入の上、  
お楽しみください。

編集・発行

## 株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富 1-3-7 ヨドコウビル  
TEL.03-3555-3431(販売) / FAX.03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、  
ホームページ上に転載することを禁止します。

本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。

また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>